

第 17 回村上記念「胃と腸」賞は 八尾恒良氏に

本誌の年間最優秀論文に与えられる村上記念「胃と腸」賞の贈呈式が、去る 7 月 15 日、文京区小石川のエーザイ本社ホールで開かれた早期胃癌研究会例会の症例検討の合間を縫って行われた。司会の神津照雄氏(千葉大学第 2 外科)から、17 回目を迎える同賞の今回の受賞者八尾恒良氏(福岡大学筑紫病院内科・消化器科)とその受賞論文「X 線・内視鏡所見からみた Crohn 病の術後経過」(胃と腸 26: 627-642)が紹介され、「胃と腸」編集委員会代表の白壁彦夫氏から賞状と賞牌が、医学書院社長金原優より賞金が、会場を埋めた諸先生の大きな拍手のなか、八尾恒良氏に贈られた。

続いて祝辞と選考経過の説明に立った西俣寛氏(鹿児島大学第 2 内科)は同論文について、「外科的手術の行われた Crohn 病の多数例に術中内視鏡を行い、残存腸管の病変を確認して術後の再発形式を検討し、日常臨床で問題になる Crohn 病における腸管の切除範囲の決定に具体的な数値を挙げて結論を示した点、また、Crohn 病の発生・進展形式を推測するうえで極めて有用なデータを呈示された点で、今後 Crohn 病を研究する者にとって必ず参考にしなければならない論文となるだろう」と述べ、「こうした研究が更に発展して、Crohn 病の治療方針が確立することを希望する」と祝辞を結んだ。

受賞の弁を求められた八尾恒良氏は、「胃と腸」には第 1 巻から多数の論文を発表して貢献してきたつもりだ



第 17 回村上記念「胃と腸」賞を受賞した八尾恒良氏。

が、なかなか受賞の榮に浴することができなかった。白壁先生のようなえらい先生も受賞していないと聞いて自らをなぐさめてきたけれども、今回の受賞でやはり白壁先生の域には達していないことがわかった」と冗談を混じえながら喜びの言葉を述べ、「X 線・内視鏡の仕事は、まだまだやることがたくさん残っている。今後はもっと若い世代が活躍されて「胃と腸」賞を受賞されるよう希望してお礼の言葉としたい」と挨拶し、満場の拍手に包まれた。



贈呈式会場。中央は選考経過を述べる西俣氏。



八尾氏の受賞を祝福する白壁氏。